

人々の生活を守りたいと夢を追い続けた二人の英雄



長草地区での大根干し



知多半島内のため池



濱島さん(左)・久野さん(右)



農家に説明する濱島さん



愛知用水の水路工事



愛知用水通水式

大府市では、愛知用水の誕生前から、さまざまな農作物を生産していました。しかし、知多半島は夏の雨が少なく、大きな川もないことから、干ばつに悩まされていました。そのため、先人は知恵を絞り、市内に数多くのため池を造り、水の供給に努めながら営農を継続。それでも雨が少なく、ため池の水が満水にならない時もあり、せつかく植えた稲が実らないこともありました。

水不足に悩む日々

昭和36年に通水した愛知用水。愛知県の尾張丘陵部から知多半島にかけての一带に、上水道用・農業用・工業用の水を供給しています。大府市は温暖な気候に恵まれ、名古屋市に近いことから、古くから農業が盛んでした。今でこそブドウが有名ですが、昔の特産品といえば大根で、大府駅から列車で京阪地方に出荷されるほど、県内有数の大根の名産地でした。

暮らしを支える水

馳せる思い

二人の思いが一つに
別々の場所で同じ夢を描いていた久野さんと濱島さん。この二人を引き合わせたのは、久野さん

二人の思いが一つに

昭和中期、水不足の課題解決のため、愛知用水の整備に尽力したが、知多市出身の久野庄太郎さんと大府市に住んでいた濱島辰雄さんです。久野さんは小学校卒業後、家業の農業に専念。明治末期、知多郡農業会副会長を務めていた森田萬右衛門の「三河の明治用水のように、木曾川から水を引き、用水を造り、農業を根本的に改良するべきである」という言葉を耳にして、愛知用水の整備に向けて動き出します。一方、濱島さんは農業関係の学校で学んだ後、昭和14年に南満州鉄道調査部に入社。草の生育に不可欠な水を確保するためのダム計画を作成します。昭和19年、尾張東部から知多半島にかけての大干ばつを受け、かつてのダム計画を思い出し、木曾川から導水して知多半島まで水を引く図面を書き始めました。

愛知用水の誕生

二人の尽力により、愛知用水概要図が完成。アメリカと日本の技術者が結集し、昭和36年9月30日に、岐阜県加茂郡八百津町から愛知県知多郡南知多町に至る112キロの幹線水路と、幹線水路から分岐して農業用の水を導く支線水路1012キロからなる、愛知用水が通水しました。現在、大府市では小学校の道徳の副読本『大府市にゆかりのある人』を制作。この副読本に愛知用水の生みの親である濱島さんを掲載し、小学4年生の授業で活用しています。

中部日本新聞(昭和23年7月18日)



その名も愛知用水

参考文献 『大府市誌』『愛知用水と営農』『愛知用水土地改良区創立七十周年記念誌』



水の出会いを越え、

木を育む

この美しい景色が続くように

私たちの生活に欠かせない水。

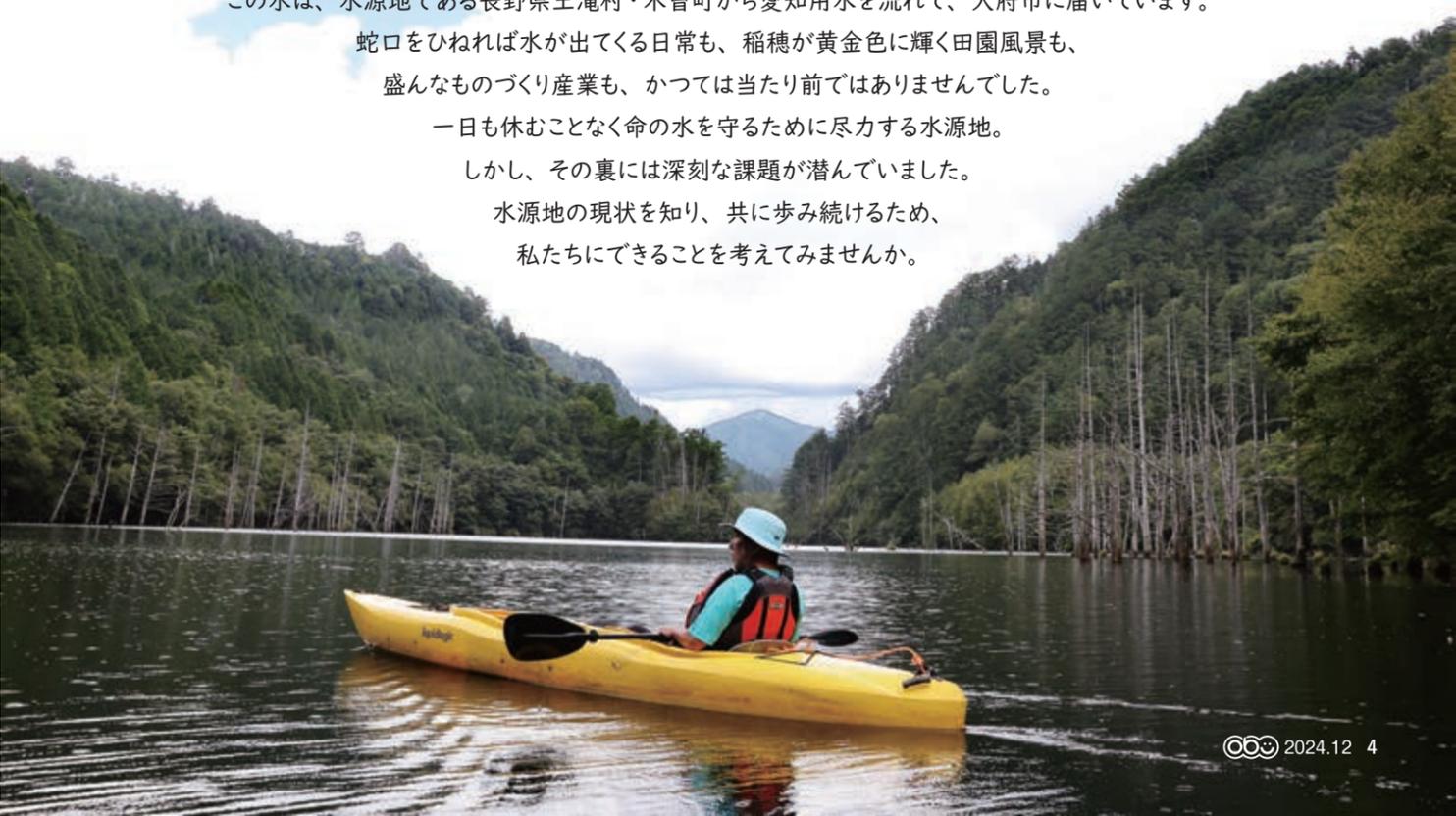
この水は、水源地である長野県王滝村・木曾町から愛知用水を流れて、大府市に届いています。

蛇口をひねれば水が出てくる日常も、稲穂が黄金色に輝く田園風景も、盛んなものづくり産業も、かつては当たり前ではありませんでした。

一日も休むことなく命の水を守るために尽力する水源地。

しかし、その裏には深刻な課題が潜んでいました。

水源地の現状を知り、共に歩み続けるため、私たちにできることを考えてみませんか。





牧尾ダム

水源地と受益市町の架け橋

私たちの使命は、愛知用水の水を安定的に知多半島の先まで送ること。水源地における社会経済の持続は、水資源の養成や安定した用水供給につながります。

大府市の皆さんには、水源地が衰退することがないように、今後も水源林の保全をはじめ、水源地の将来や水の大切さを継続的に考えてほしいです。私たちは、水のつながりが育んだ絆を大切に「水源地と受益市町の架け橋」であり続けます。

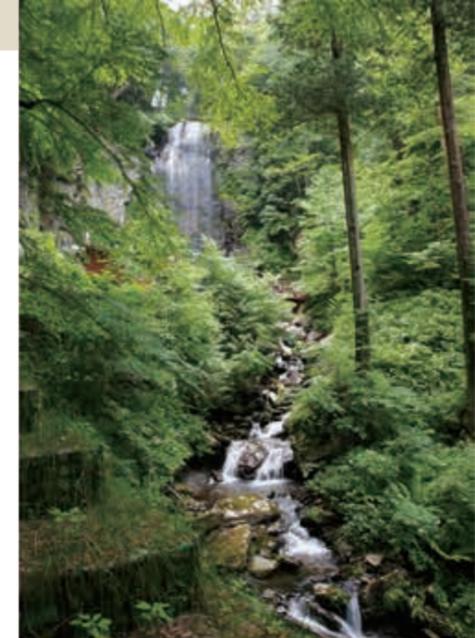
水資源機構 愛知用水総合管理所 牧尾管理所

所長 吉田 剛さん



かつて、人々の暮らしは、流域に。

安土桃山時代から江戸時代にかけて、木曾の木材は、城などの建築用材として盛んに活用されました。江戸時代後期には、木曾川の流れを活用し、木曾から名古屋まで材木を運搬する「木曾式伐木運材法」が確立。河川舟運が発達すると、川が交通・運搬機能を担うようになり、人・物・文化の交流が始まりました。明治期以降、自動車・鉄道が発達すると河川舟運は衰退し、川の流域の暮らしという概念は希薄になり、低平地への居住や人口集中が進みました。時代とともに社会の変化があっても、水源地として私たちの生活を支える王滝村・木曾町。住み良いまちとして成長を遂げた今の大府市の姿は、水源地の存在なくして、存在し得ませんでした。



森林は国土の約3分の2を占め、日本は世界でも有数の森林国です。その中でも、王滝村と木曾町には森林が多くあります。森林は木材などの生産のほか、水を蓄えて、地滑りなどの土砂災害を防いだり、多様な生き物の生態系を守ったり、二酸化炭素を吸収して地球温暖化を防いだりするなど、地球を守るためのさまざまな役割を果たしています。

王滝村役場・木曾町役場の 担当者に聞く水源地の

今

担い手育成

長野県の最西端に位置する王滝村は、人口640人(令和6年11月現在)で、村域の約95%を森林が占めます。自然環境を生かしたアウトドアスポーツが盛んで、観光産業を柱とした地域振興を行っています。

水と緑のふるさと

王滝村

森林の理想は、林齢(森林の年齢)が均等になるよう、順番に植林すべきですが、切っても利用方法がないことから、現在は植えられず、若い林齢の樹木が減っています。王滝村が抱える森林の課題は、担い手が不足していること。林業は、危険できつい仕事のイメージがあり、辞めてしまう人が多いです。山を育てるには、人を育てることが大切です。木曾地域にある長野県林業大学校・木曾青峰高校・上松技術専門学校という学びのフィールドを生かし、長野県と協力して担い手を確保したいと思っています。県外から就学した林業大学校などの卒業生が、この地で林業に携わることで森林整備が進み、地域の活性化にもつながります。また、木材の活用先が決まることで、新しい木を植えることもできます。大府市の皆さんには、市民のボランティアバスツアーや市

学びのフィールドを

生かして

担い手を育てたい

経済産業課

西路 博さん

四季の感動あふれる

木曾町

長野県の南西部に位置する木曾町は、人口9851人(令和6年11月現在)で、町域の90%以上を森林が占めます。四季折々の自然風景が、人々の暮らしや生活環境を支えています。

令和6年度から町を一大林業地にするため「木の産業づくり事業」を開始しました。木曾町にはカラマツが多く、伐採適齢期を迎えています。計画的に主伐(※)するためには、木材の利活用を促進させなければいけません。そのため、町内産カラマツのブランド化に取り組み始めました。木曾町役場の庁舎には、町有林のカラマツを利用しています。カラマツの良さを知ってもらおうとモデルハウスの役割も担っています。木曾のカラマツを山から切り出して、供給体制を確保し、エンドユーザーとなる中高層木造建築や内装材などへの利用につながる仕組みを作っていきます。切るだけではなく、切った場所に木を植えて循環型の森林整備をすることで、災害に強い山をつくり、大府市などの下流自治体へ、きれいな水を供給し続けられます。切って・使って・植える循環型林業の仕組み

※主伐：成熟した森林の伐採
くみを構築することで、町が目指す一大林業地が完成します。「木の産業づくり事業」は、始まったばかりです。計画的な森林整備と戦略的なカラマツのブランド化を図りながら、中・長期視点で、木材の安定的な供給と利活用に取り組みしていきたいと思っています。

一大林業地を目指し

「木の産業づくり」を

進めたい

建設農林課

鎌田 俊介さん

木の利活用





こどもたちに
山に関心を持ってほしい



御料館
古幡 和久さん

木曾で生まれて、木曾で育ち、木曾の学校を出て、就職先を探していたときに国家公務員の林業職に合格しました。林業は自然が相手になるので、型にはまらず面白い仕事であり、自然を守る大切な仕事です。深刻な林業の担い手不足が叫ばれていますが、今を生きる若者世代へと林業を継承していきたいです。現在は御料館で、林業の歴史について話しています。標本などを見て、昆虫や動物に興味を持ってもらい、山への関心を高めてもらえたらうれしいです。

国有林を管理し、山を守る

木曾町の有形文化財に指定されている木曾地域最大の洋風建築物「御料館」。昭和2年に建築された旧帝室林野局木曾支局の庁舎で、平成22年に木曾町が取得し、保存・復元工事が実施され、平成26年から一般公開されています。

同館で働く古幡和久さんは、かつて国有林を整備・保全する部署で働いていました。

INTERVIEW

木曾の木材を全国へ届ける

株式会社木曾谷Kousakuは、木曾町の木材加工業者の一つ。従業員の多くは地元の学校を出て、全国に木曾の木材を使った製品を届けています。

同社は、ブランドである木曾ヒノキを活用した特注家具などの「ものづくり」に加えて、こどもの木育環境づくりの「ことづくり」、オフィス空間などの「まづくり」を行い、まちの活性化に貢献しています。

INTERVIEW

当社は、オリジナルの木曾ヒノキ合板と最新の木工技術を導入したシステム的な家具作りをしているので、若手でも安全に即戦力として働けます。特注家具の製造は難しいこともあります。試行錯誤しながらも完成したときは達成感があり、やりがいにもつながります。木曾ヒノキは、寒い地域でゆっくりと成長するので木目が細かく、強度があります。木曾町は森林資源が豊富にあり、優れた木工技術もあることから、今後の可能性を秘めています。ぜひ日常に木を取り入れてほしいです。



木の温もりを

日常に取り入れてほしい



株式会社木曾谷Kousaku
小坂 正海さん

「山と暮らす私たち」

「王滝村・木曾町で働く人々」



木曾のおいしい水
みんなで楽しみたい

水が伝える森の重要性

長野県上松町出身の創業者が、上京した時に地元の水のおいしさを思い出し、ふるさとの木曾の御嶽山の自然や水を多くの人に届けたいと、40年前に水をテーマとした事業を立ち上げました。

木曾の水をブランド化し、全国へのPRを進め、地元の雇用にも結び付いた取り組みとして成長を遂げています。

INTERVIEW

木曾の水は、自然豊かな環境で、古くから体積している岩盤を通った湧き水なので、ミネラルがバランス良く溶け込んでいます。森がしっかりと循環していれば、降った水が川に流れ、その養分が川を豊かにして、生き物がすめる環境をつくり、最終的に海が美しくなります。森をきれいな環境で保つという小さな積み重ねが、人の命を守ることにつながります。森への投資が、水の豊かさを保つためにも必要であると思います。



(株)21インコーポレーション
代表取締役会長 砂山 純子さん

バイオマスで、地域を活性化

木曾町は、再生可能エネルギーの積極的な導入などにより、地球温暖化対策につなげる取り組みを進めています。潤沢な森林資源がある一方、間伐などで生まれた、建築用材として使えない原木が林地に残されている課題がありました。その木材をウッドチップやまきなどに加工し、燃料として利用するモデル事業を平成30年から開始しています。

INTERVIEW

生産したウッドチップは、木曾町温水プールや木曾おもちゃ美術館などのボイラーの燃料として活用されています。将来的には一般家庭の暖房などにも導入するなど、活用場所が増えたらうれしいです。そうすることで雇用の創出にもつながると思います。今、林業の人手不足は深刻です。「林業仕事=男仕事」の考えが強いかもしれませんが、これからは性別関係なく「私は林業がしたい」「この仕事してみたい」と思えるような働ける環境をアピールしていきたいです。

性別なんて関係なく
かつこよく働きたい



木曾町木質バイオマス事業協同組合
佐藤 佳織さん



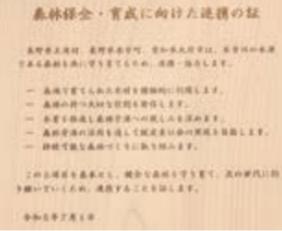
木を育む 水源地を思い、一歩ずつ行動に



水源地の王滝村・木曾町との連携協定の締結

大府市は、令和5年7月1日に王滝村・木曾町と「水源の森林の保全・育成に関する連携協定」を締結しました。この協定は、木曾川水系の上流と下流の自治体が相互に連携し、水源地の木材の利用促進・市民への啓発・こどもの木育の推進などに取り組むものです。

市は、国から配分される森林環境譲与税(※)も財源の一部に活用しながら、市民や市内の企業・団体と協力し、下流自治体の役割を果たそうとしています。



森林環境譲与税

令和6年度から、国から国税の森林環境税として個人住民税均等割と併せて1人年1000円が課税されています。この森林環境税は「森林環境譲与税」として、都道府県・市町村に配分され、森林の整備などの財源に充てられます。



次の山を作る

(株)藤本林業

代表取締役 藤本 直大さん

持続可能な未来への一歩

私たちは豊かな自然環境を保ちながら、森林資源を有効活用し、地域社会に貢献することを目指しています。木を切った後に次の木を植え、山全体を管理することも重要です。木が育つには10~20年かかります。先の見えない仕事だけど、必ず未来につながると信じて仕事にあたっています。切ってみると面白いもので、虫が入っていたり、製材するときに割れてしまったりすることもあります。自然相手の仕事なので、毎回違う景色が見られることに魅力を感じています。林業は、木を切る・使うにとどまらず、適切な管理により山を存在させ、そこで育まれた水を下流自治体に送ることも使命の一つです。今、私が行っている仕事は「下流自治体の皆さんの生活に貢献している」。いつもそう言い聞かせています。



受益地域と水源地域の交流イベント

愛知用水土地改良区が主催し、JAあぐりタウンげんきの郷で毎年開催されている知多半島と木曾地域の交流イベント「愛知用水と水源の森」。愛知用水を広くPRするとともに、王滝村・木曾町との関わりや水の大切さを知ってもらい、水源地とのつながりを深めています。



INTERVIEW

愛知用水管理区協議会
会長 加納 俊則さん



水がないと、野菜も米もできません。愛知用水がなければ、大府市の農業は衰退の一途をたどっていたと推測します。

愛知用水は「命の水」を届けてくれています。引き続き、安定した水の供給が続き、農業振興ができるよう、私も尽力したいです。



出前授業「水源の役割を持つ森林」学習

市と愛知用水土地改良区大府事務所は、毎年市内の小学4年生を対象に「愛知用水と大府の農業」と題して授業を行い、子どもたちは愛知用水の誕生秘話などを学びました。授業の最後に子どもたちが目にしたのは、2万5千分の1の愛知用水概要図。この図は、昭和23年8月に愛知用水の生みの親の久野庄太郎さんと濱島辰雄さんが制作したもので、岐阜県加茂郡八百津町から知多半島の先まで続く愛知用水を青色の線で表しています。子どもたちは、愛知用水の完成という偉業を成し遂げた二人の功績に驚いていました。



愛知用水土地改良区
大府事務所
所長 川島 祐治さん



INTERVIEW

大東小学校4年生
古瀬 美祈さん



愛知用水が通る前は、市内にため池が100カ所以上あったことを知り、驚きました。

日頃からおいしい水が飲めることや使えることに感謝して、大切に使いしていきたいです。

水はなくてはならないものなので、子どもたちには愛知用水の将来を守ってもらいたいと思っています。子どもたちの中には、過去に水を求めて争いが起きていたことを知らなかったとの声もあります。昔の人の苦労があって、今おいしい水が飲めていることを理解してもらえてうれしいです。

水源地の課題

※人工林：人の手で植えて育てた木からできている森林

現在5割を超える人工林(※)は50年以上経過し、伐採の適齢期を迎えています。

しかし、木材の利用が進まず、林業の採算悪化や担い手不足などにより、必要な再生林や整備ができていないことが課題となっています。

「切って、使って、植えて、育てる」という

森林資源の循環を確かなものにするのが求められています。

今、大府市に求められること

木曾川の上流自治体である水源地の森林の保全・育成は、下流自治体の私たちの生活にとっても不可欠な取り組みです。水の恵みとともに発展した大府市が、持続可能なまちであり続けるためには、水源地と手を取り合い、連携・協力することが求められています。

水源地には、数え切れない魅力と豊富な森林資源があります。

その魅力を最大限活用し、まさに今、水の出会いを越え、「木を育む」取り組みを始めています。

環境

を守る木育

市内企業も水源地と連携。

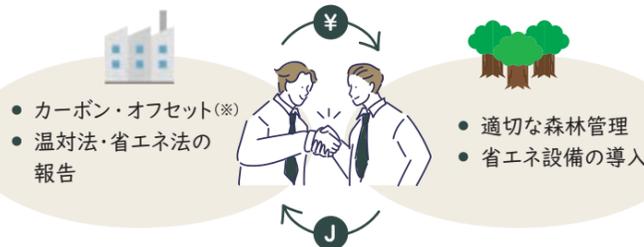
J-クレジットで水源地の活性化とゼロカーボンに貢献

王滝村・木曽町は、森林整備による二酸化炭素などの温室効果ガス吸収量を、J-クレジット(※)として販売しています。大府市は、水源地との地域間連携とゼロカーボンシティの実現のため、市内企業と共にJ-クレジットを購入する取り組みを始めています。

J-クレジットを購入した企業は、脱炭素経営の一環として、法律に基づく温室効果ガスなどの排出量の報告、商品・イベントのPRなどに活用できます。大府市と市内企業によるJ-クレジットの購入代金は、王滝村・木曽町のさらなる森林整備や地域の活性化に活用されます。

J-クレジット

森林の保全・育成による温室効果ガスなどの吸収量・省エネルギー設備の導入・再生可能エネルギーの利用による温室効果ガスなどの排出削減量を、クレジットとして国が認証する制度。



※カーボン・オフセット：生活や経済活動に伴い排出する温室効果ガスを認識・削減した上で、J-クレジットを購入することで、その排出量を埋め合わせる

INTERVIEW

大和機工(株)

取締役 早川 安博さん



地元企業として社会貢献に積極的に取り組む中、大府市が進めるゼロカーボンシティへの実現に協力しようと、J-クレジットを12トンを購入(約20万円)することを決めました。この取り組みが、愛知用水の受益市町を中心に、市内・県内企業にも広がることを願っています。王滝村・木曽町の森林整備や林業の担い手不足の解消に役立てるとうれいいます。

木曽ヒノキ材を使用した木製ロッカーの設置

こどもたちがランドセルやリュックなどを置く教室のロッカーの改修に合わせ、(株)藤本林業が伐採した王滝村産のヒノキを100%使用した木製ロッカーを設置しました。

掃除道具棚には「水を介して密接な関係がある、王滝村のことを学び、交流を育みましょう」とメッセージが刻まれています。

INTERVIEW

大府児童老人福祉センター
館長 小栗 忍



大府児童老人福祉センターの木質空間の整備

大府児童老人福祉センターの浴室をリニューアルし、木質空間の整備を進めています。(株)木曾谷Kousakuの協力で、王滝村産の木材を使った家具・内装材を製作。全世代が心地よく安らげる、新たな憩いの場として、令和7年4月のオープンを予定しています。

王滝村の木材を使った空間に机・椅子などを配置し、多世代がゆったりと交流でき、木のおもちゃで遊べるスペースを設置します。木の温もりを感じられる新たな憩いの場が誕生します。ぜひ、開館まで楽しみにお待ちください。

交流

をもたらし木育

遠く離れた場所で、大府市民が作る森林

平成22年度から、大府市職員互助会が王滝村と「水源の森パートナー協定」を締結し、森林間伐活動を行ってきました。平成26年度には市民団体による森林間伐活動を行い、平成27年度から市民公募型の森林間伐ボランティアバスツアー事業を開始しました。今年には20人の参加者が、森林間伐を行いました。

市民参加者
尾高公輔さん
あかねさん

何気なく使っている水が、王滝村と木曽町から流れてきていることを知り、日頃の感謝を込めて夫婦で参加しました。水をきっかけに、森林を学ぶことはとても大事だと感じました。

良質な木のおもちゃで多様な遊びを。 おもちゃ美術館の整備

こどもたちが木や森との関わりを学びながら、木特有の木目・手触り・重さ・音・香りなどを五感で感じ、創造力と感性を養う新たなこども・子育て支援施設として「おもちゃ美術館」の整備を計画しています。

「夏の暑い時期や雨など、天候に左右されることなく、屋内で安全に遊ぶことができる場所がほしい」という多くの市民の声を受け、「おおぶこども輝く未来応援八策」に掲げる「こどものための屋内遊戯施設」として、令和9年4月にオープンを予定しています。9月に開催した市民ワークショップから得られたアイデアを参考にして、パイオリンやブドウなど、大府らしさを遊具に取り入れ、オリジナリティのある施設としていきます。

木育キャラバン。木を五感で

おもちゃ美術館の整備に合わせ、赤ちゃんから大人まで楽しめる木のおもちゃを全国から集め、自由に触れて遊べる「木育キャラバン」を8月に市内で初開催しました。

総勢1800人以上のこどもと大人が、300点以上の国産材を中心とした木のおもちゃに夢中になって遊ぶ姿が見られました。さらに、水源地の木材などを活用した木工ワークショップも開催しました。



水源地の魅力体験 宿泊施設利用助成制度

水源地との交流を深めるため、王滝村・木曽町にある宿泊施設に宿泊する際の料金の一部を助成しています。



- ▶ 対象 市内在住の方
 - ▶ 助成額 1人1泊当たり最大3000円(一年度につき3泊まで)
 - ▶ 申込 宿泊施設に助成制度を利用できるか確認した上で予約し、申請書に必要書類を添えて、文化スポーツ交流課窓口へ。
- ※申請書は、文化スポーツ交流課・市ウェブサイトを用意しています。

水が引き合わせた縁

約150キロ。これは、王滝村・木曾町と大府市の距離です。
遠く離れていても、水が引き合わせた大切な縁。

昭和36年に完成した愛知用水の通水以来、水源地からは一日も休むことなく、水が届いています。
水の恵みを受けた大府市では、ブドウ・タマネギ・キャベツなどの栽培により都市近郊農業が振興し、
自動車関連産業がまちを発展させました。まさに、水と共に成長したまちです。

しかし、かつての私たちは深刻な水不足に悩まされ、先人の知恵の結集により誕生した愛知用水、
そして、水源地の存在に助けられたことを忘れてはいけません。

通水から約64年が経っても、変わらずに水の恩恵を受ける私たち。

かつての悩みは解決されていても、月日が流れ、今、水源地が大きな課題に直面しています。

それは、伐採適齢期にある森林の利活用が進んでいないこと。

水源地の課題は、私たちの生活にも直結します。

水源地と一緒に、その課題を解決する一つの糸口。

それは木を育む「木育」。

今、市内では、木育をキーワードとする取り組みが始まっています。

木への関心を持つことを入口に、木材の利活用・ボランティア活動・観光・Jークレジットなど、

水源地との関わり方の出口は、さまざまあります。

「木育」という苗木を植えた今。大きく成長するまでには、長い年月がかかるかもしれません。

しかし、それはいつか、私たち、私たちのこども・孫の世代の生活を支える大きな木になります。

今から一つ一つ、行動に移してみませんか。

水が引き合わせた縁を大切に。

王滝村・木曾町と大府市が持続可能な都市であり続けるために。

笑顔がなによりの証

木がもたらしたこの笑顔。

「木を育む」

私たちができる、水源地への恩返しです。

